

女子大生格闘家タイカ vs クロマル【格ゲー風？】

とある廃屋…そこでは日夜、屈強な女達がストリートファイトに明け暮れていた。
常に戦闘が繰り返されるわけではないが、時たま修練を積んだ者がふらっとやって来てはそれに応えるように誰かがやってくる。
運動部が強い事で有名な女子高・女子大に近いせいか、自然に女性の強者が集まり、異種格闘技戦の会場の様な場所になっていた。女達は切磋琢磨し、腕自慢な男がやってきても負けないほど……少なくともリーダー格は、一度も男に負けたことはなかった。
が、今そこでは闘う者は一人もいない。

『じゅぽっ！じゅぽっ！じゅくっ！じゅぽっ！』

「あひっ、ひゃんっ！も、ああああ！」

敗北したのか、一人の女格闘家が情けない声で喘いでいる。

女が男に負けて犯される事はそれほど珍しい事ではない……もちろん後に報復は来るが、負けたら言いなりなのは男も女も同じである。

が、今一番の問題は、犯す側が男かどうか…それどころか人間ではない異形だという事。

直径が1mはあるか、大人の上半身ほど巨大な、黒光りする球体に、大きく裂けた表面から覗く巨大な眼。更にその球体から、グロテスクな触手がいくつも伸び、空手黒帯の女戦士を締め付け、拘束し、犯している。

更にあるう事か女は無理矢理犯されているにも関わらず、快楽に悶えて欲蜜を垂れ流している。

そうこうしている内に、二度の精を受けてすっかり従順になった肉壺を犯す一本がピストンの速さを増し、一際大きく怒張する。

『びゅーっ！びゅ〜〜っ!!』

「あひゃああ、また中にいい！イクっ！イクっううううっ！」

快楽の限界に墮とされ、思考をスパークさせながら女は意識を失くす。

■翌日

いつもは廃屋でたむろする女格闘家達が、同程度の人数……七、八人の男達に攻撃されていた。

最近女達の調子が悪い事を耳にした男達は、この機を逃すまいと目当ての女を犯すため、あるいは純粋に決着を付けるため、躍起になって襲いかかる。

武術の道に卑怯も汚いもない……が、弱った上に王者不在のところを狙う上げつないやり方に、女達の副将格が吼える。

「お前ら、恥ずかしくないのか……あんっ！」

「ん？偉く可愛い声出す様になったじゃないか……しばらく見ない内にやりまくってたのか？」

「ち、違っ触るなあっ！」

肩と手首を押さえ付けられ、甲高い声をあげながら力が入らない体でじたばたする。

その一方、早くも一組の男女が雌雄を決した。

「はひいっ！」

男の蹴りをブロックしながら、その威力に堪え切れず、くると背を見せて倒れ込む。

自身の動きでめくれ上がったスカートから見える尻肉を見せつける様に荒息で突っ伏すのは昨日、異形に慰み者にされた彼女だ。

「何だお前、弱くなりすぎだろ……もしかしてやられたいのかあ？」

ニタニタ笑いながら、蹴り飛ばした男が下着を覗きこむ。

「うわ、こいつもう濡れてるぞ！そんなに俺のが欲しかったのかよ！」

「ひ……ひがうの、見ちゃらめえ……」

男を拒絶し、首を振りながら這いずって逃げる……ようでいて、ねっとり舌を湿らせてオネダリし、媚尻を振って誘っているようにしか見えない動きをする敗北戦士。

「やめろ、そいつは……！」

隣で防戦一方なショートカットの女柔道家が止めようとするが、言い終わる頃には柔らかに白い布を摺り下ろされ、負女子はあっさり男を突き込まれる。

「ひゃあああん！」

前戯も無しに、あるいは敗北までは前戯にあたるのか、一挿して愛液を噴き出して戦慄く。

「はっ、こっちも弱過ぎだろっ」

ギチギチな負けマンに早くも達しそうになり、汗びっしょりにして勝利者はゆっくり前後する。

「お前らっいいい加減にっ！」

副将が仲間を犯される光景を目にした時は、もう男は勝利の証を敗北者に刻み込む寸前だった。

「ひゃめっ！中はらめえええ！」

「あーもう出すぞっ出す……！」

仲間達が絶望した刹那、疾風が種付けにかかる男の脇腹を蹴り飛ばす。

骨が碎ける音と共に女の尻から蹴りはがされ、一瞬で萎えた陰茎からだらだと子種が垂れる。

声も出せず男が倒れる頃には、疾風が次々と男達を、一撃かすめて弾き、割り、切り裂いていく。

助けられた女達は、涙交じりに笑顔をつくり、吹きやんだ疾風を迎える。

「お……遅いぞタイカあ！」

「へへ、お待たせー」

ちろっと舌を出し、武者修行から帰って来た大将格の一人、大花が男どもを踏み付けて軽く返事する。

■十分後

身ぐるみを剥ぎ、財布もケータイも奪った男達を簀巻きにし、人通りの少ない場所に放り捨てる。

負けたら犯される代償を考えれば、当然の仕打ちだった。

「そんなんだから弱いのだよ！」

生ける屍に悪態を付くタイカ。特技は空手、カンフーなどの格闘技。趣味は格ゲーと強姦魔退治の可憐な女子大生。

両胸にぶら下げた、巨大でありながら重力に負けない天然ものの巨峰、平均程度の身長とあまり本格的な格闘家向きではない体つきでありながら、公式非公式・女男問わず負け知らずで、屈強な戦士達のリーダー格だ。

トレードマークの空手風道着にミニスカートというオリジナルの戦闘服に身を包んだ彼女は、圧倒的な強さでこの辺ではカリスマ的存在だったが、突然武者修行に出てしまい、半年ぶりにやっと帰って来たのだ。

「す、凄いなタイカ！また強くなったな！」

「あ、京ちゃん、大丈夫…」

「スゴいです先輩！あんな一瞬で、私、動き見えませんでしたよ！」

「どんな格闘家達と闘ったんですかあ？」

「え？あ、うん、まあ、色々…」

さすが女戦士、立ち直りも早い。タイカが安否を気遣う間もなく懐かしさに喜ぶ仲間に次々と質問攻めにされる。

犯されていた負女子……遥子も、遠巻きにだか微笑んでタイカを見ている。

「……でね、そこの強姦魔たちも弱くってさー」

土産話に花を咲かせ、更に技に磨きをかけた事、一度も負けなかった事、レイプ犯をおびき出して返り討ちにし、その地元市警から表彰された事……様々な体験を聞かせる。一段落したところで、今度はタイカが利き返す。

「ところでさあ京ちゃん？なんであんなヤツらに負けそうになってたの？」

「う、いや、それは……」

敢えて質問攻めにして聞かれたくなかった所を問い詰められ、冷や汗を流して目を反らす。

「じ、実は……」

……………

「ええ〜っ!?バケモノにヤラれちゃった？みんな?!」

「ちょ、声が大きい……！」

いくら人通りが少ないとはいえ、声高々に敗姦宣言され、焦る副将格の黒髪美人、京。

どうやら武者修行に行っている間、廃屋には謎の化物が現れたらしい。女戦士一人になった所を襲い、圧倒的な強さで弱らせた後に犯し、キッチリ三発種を仕込んで、KOされてしまう……

そして一度その化物に犯されてからというもの、男と闘う時は身体に力が入らなくなり、火照って敏感になり戦闘どころではなくなるという。

女戦士は初めこそ強者への興味に挑んだものの次々と快楽に打ちのめされ、遂には全員が種付け絶頂を味わってしまったらしい。

俄かにには信じ難い話だが、マジメで厳格な京の話の聞いて何を言わんかを理解する。

「つまり……あたしにそいつをブチのめして欲しいってことね♪」

もしかしてタイカすら敵わないのでは……そんな不安を吹き飛ばす、まさに花の様な笑顔にウインク付きで明るく返す。

「頼んだぞ……私達の仇を討ってくれ……！」

■廃屋

あり余った体力で、話を聞くや否やすぐさま廃屋に向かったタイカ。

「薄暗くなってから」「女一人」

出現条件を満たし、ポキポキ骨を鳴らしながら大将が一人で廃屋の闇の中にずんずん踏みこんでいく。

すると不意に黒い薄霧が辺りに漂いはじめ、気が付いた時には入口が閉められている。

「ッ!?!」

わずかに逡巡した直後、電気が使われないはずの廃屋内が急に明るくなる。

片手で三割ほど埋めた視界の中に、どこから現れたのか、いつの間にか巨大な浮遊球がぶよぶよと上下していた。

「！これが、化物……?!」

突然の異形登場に流石にゾッとする拳姫だが、仲間の怨みを込めて怒りの形相で言葉を叩き付ける。

「アンタね！あたしの友達を好き勝手してくれたのは！今日は覚悟しなさいよ！」

……………

返事なのかどうか、黒い塊はぶよぶよ浮いて一つ目でこちらを見ながら、ずるりと球と同じくてらてらと妖しく光る触手を何本も生やす。

「ん、やる気!?!」

早速戦闘か———そう思いタイカが構えた瞬間、『ピピピピッ』と聞き覚えのある音を鳴らして前後左右の壁が光る。

そこには中央に『99』、左側には撮ったのか作ったのか、『Taika』の……見る側からして右側を向いた写真とバーが。

左側には『Kuromaru』の写真とバーが伸びる。

「何コレ……格ゲー？」

自分が愛してやまない光景に、思わず殺気・闘気とは別にテンションが上がる。
よく見ればバーの端に、黒い丸印が三つ並んでいる。おそらく獲ったラウンドを表示するものだろう。「三発」はここから来ていると推測できた。
「は一ん、なるほどなるほど……」

おそらくゲーム感覚で女を襲っていたのだろう。愛するジャンルを穢され、タイカは一層怒りを燃やす。
睨みつけて身構えた時、天井からぶら下がった信号がカウントダウンを始める。

（今度はこっちが3ラウンドきっちりボコってやる……格ゲーを笑う者は格ゲーに泣くのよ…！）

負けられない理由が一つ増え、怒り轟々でありながら本能で精神を研ぎ澄ます。
『**ピーッ！**』と信号が碧に変わり、画面のカウントが98になろうかというその時、
「**鳳凰ッ！**」

跳躍のための踏ん張りも見せず、理論上有り得ない速度で高々と舞う。
くると身を翻し、空中で逆さになって信号を蹴る。

「**穿鎚ッ！！**」

急速落下し、更に回転を加えた踵落としが繰り出される。

正に鎚がめり込んだように球体が凹む。速過ぎて反応できないのだろうか、クリーンヒットして浮遊球は勢いよく地に叩き付けられる。
呻き声なのか、籠った人ならざる音を出す黒球だが、あまりの衝撃に揺れ、ヒビが入る地の轟音にかき消される。

（……効いてるみたいね）

格ゲーマニアのタイカは、強敵相手には技を繰出す時、技名を叫ぶ癖があった（通称格ゲーモード）
気合を入れて声を出すと実際に入る力が違う、という理屈から始めたが、タイカには本当に効果がある様だ。
技名を言いながら放った技は全て決定打を与え、外した事すらない。

「**紅蓮……**」

息もつかせず、動かないのか動けないのか、コンクリに少し埋まった妖体に踏み込み、大きく右手を振りかぶる。

「**掃牙ッ！！**」

鉄拳が叩き込まれ、更に埋まる『kuromaru』。

ライフル弾の様に挟り込んだ拳は、着弾時の摩擦で正に燃えるほど瞬速で回転し、うっすら煙をあげる。
チラリと構えたまま目線を反らし、体力バーを確認する。どうやらかなり効いているようで、黄色が二、三割ほど黒くなっているのが分かった。ダメージを表現しているのか、写真も変化し苦悶の表情になっている。

（よおおっし、このまま一気に行くわよ！）

好きな女キャラを真似たガッツポーズで気合を入れ、更に動きを加速させる。
見た事もない相手に、見えない部分を作るのはまずい、そう考えたタイカは黒球をサッカーボールの様に思い切り蹴り飛ばす。
弾力のある乾いた音と共に、素直に跳んだ球が壁にぶつかる。

「**ダッシュKからのッ！**」

浮いた……浮かせられた球を潜る様に接近し、頭の上の塊に向けて肘鉄。

再び壁に叩き付け、ミシッパキッと破片が散る音置き去りにする様に、瞬く間に下から蹴り上げ、三打目に壁を使った逆さ飛び蹴りを浴びせる。

「**龍皇炎舞うっ！！**」

最後に後ろ回しで、またしても巨大な球体を蹴り弾く。

十分な手応えを感じ、またチラリとバーを確認する。黒くなった部分は半分をやや越えたか。写真の表情も更に一段険しいものになった。

ゲームでもここから逆転は難しいだろう（キャラ性能にもよるが）

ご丁寧にヒット確認もしてくれるのか、大きく「4hit」とタイカ側に現れる。

（しかしこいつ……）

七度殴って蹴っても、本体はダメージを表情に出さない。呻いたのか、時折「ぐもっ」というような鈍い音を出すだけだ。

若干のやりにくさを感じつつも、フルスロットルで攻撃再開しかけた時、黒光りする触手がぶるぶると蠢く。

痙攣が極まり、ようやくこちら目がけて黒筋を伸ばす。

「っ……とお！」

脚を止め、一閃を反り返って避ける。

確かに速い。ウェイトもある。当たればただでは済まないだろう。しかし疾風の動きを捕えるには至らず、いくつもの触手が何度も空振りする。

「もうい〜い？」

またしてもゲームキャラのモノマネで、本来は挑発のセリフを落胆に使い、反撃の準備をする。

黒くしなやかな太鞭の隙間を狙い定め、本体にトドメを刺そうと構える。

しかし残り時間が「89」…開始から十秒経過を示した途端、黒球の目がカッと赤くなる。

既に踏み込み、蹴りを放っているタイカ。異変に気付くも、何かが起こる前に———そう思い、渾身の蹴りを叩き込む、が。

『**ずぶっ**』

「う、ええっ?！」

下半球を極端に軟化させたクロマルが、沼の様に脚を取り込んでいく

ずぶずぶと呑み込まれるように埋まっていき、引っこ抜こうとしてもまるで通じない。

じたばたする両手片脚を、先程とは比べ物にならない速度で触手が捕まえる。

「は、離せえっ……っ？」

急に体が押し出されたと思うと、両手両脚が広げられ、大の字になって浮かされている。

そしていつの間にか、巨大な突起……ミニサイズの触手だろうか。まるで……男性器のような、赤黒くぬめるものがびっしり生えた三角木馬が出現する。

「ひいっやっ……！」

気持ち悪さに、青くなって小さい悲鳴を上げたと同時に、木馬に股間を押し付けられる。

両手を触手に動かされ、更に木馬が前後し、まるで自分がそうしているかの如く下着越しに秘部が擦り上げられる。

『ずりっ！ずりりっ！ずるうう！』

「ああっ！あはあああ！」

二、三度前後し、嬌声を上げると放り投げられる。

あまりに強い衝撃に視界が明滅する。何が起きたのか分からない。

「うそっ、何でっ？」

自分の中の込み上げてくる熱に、信じられず……しかし考える間もなく、触手が襲いかかる。

その時、触手の向こう側の壁に、でかでかと表示された「3hit」と自分の体力バーが見える。

ノーダメージの真っ黄色が、たったの一瞬で二、三割塗りつぶされていた。

そして…自分の表情が、小ダメージを表しているのか…ほんのり上気させ、何かを我慢しているようなイヤらしい顔つきに変えられていた。

（うそっ！そんな顔してないっ！）

驚愕している間にも触手が体を持ち上げる。

大きく開脚させられ、本体が下から紺色の見せパンを覗きこむ。

「こ、コラッ！見ちゃだめっ！」

可愛さから、格闘時でさえスカートを好んで着用しているものの、格ゲーキャラの様に生パンを晒すわけにはいかず。

動きやすさを殺さない救済策としての見せパンであり、今覗いている淫球にも当然派手な動きで何度か見られただろうが、ここまでまじまじと凝視されては流石に恥ずかしい。

が一つ、と本物も写真も赤くなり、また気付いて「だからそんな顔は…」と弁解しようとしたが、

器用にも太い触手の先端が、布一枚越しに敏感になった秘部に触れ、潜り込み……『くんっ』と曲がり、下着を履いたまま牝壺を晒されてしまう。

「ッッ！やめっ——」

『ずぶゅう！』

「あああうっ！」

下品に唾液をだらだら流した淫口は、経験しようがない極太をあっさり受け入れ、あろうことか刺激するために激しく蠢く。

肉鞭は眼を開いて声を出す戦士に遠慮せず、激しく荒々しく恥壺を掻き回す。

『じゅぽっ！じゅぽじゅぽじゅぽおっ！』

「ああうっ！あっ！あっ！あはあああ！」

キャラが連続攻撃を受けた様に、衝撃毎に刺激の大きさに応じて声を上げる。

ゲーム表示は天井にもあるらしく、見る見るうちに自分の体力が減らされていく。最後に大きく突き出され、「5hit」と共に体が宙に浮く。

どてっ、と尻餅をつき、五割ほど消耗したタイヤが唸る。

すぐ近くには……コンクリ床にも表示された、自分の顔。見せ付けるように段々と大きくなり、快楽に苦悶する浅ましい女の顔が映される。

「な、なんで、こんなにっ、…」

桃色に痺れる体で立ったところに、触手をいきり立たせた淫球が覆いかぶさるように飛んてくる。

「こ、このおっ！」

力任せに振った拳が運よくヒットし、「counter」表示と共にクロマルがひっくり返る。

（そ、そうよ、ヤられる前に倒せば……）

残四割を切るか、敵体力を見て再び高速打撃乱舞をお見舞いしようとするが、熱……はつきり突き付けられる快楽に下半身が震え、力が入らない。

もたもたしている間にすぐさま体勢を直した欲球が、触手を伸ばし胴に絡みつく。

高く振り上げられ、高速落下……頭蓋を叩き付ける気か、と背筋を凍らせたが、弾性のある肉椅子に優しく落とされる。

が、今の自分——逆さになり開脚まんぐり返し——の体勢に、敵の狙いが分かったと同時に。

『ずぽおおお！』

「ああ——っっ！」

同じく高速落下したのか、極太鞭が子宮めがけて打ち落とされる。

乱暴な肉騷りにも蜜を噴き出して悦ぶ。どうやら今の一撃で、残り体力の三割強は削られたようだ。

アクロバティックな姿勢に、女戦士は為す術も無く啼き叫ぶ。

更に淫棒が力を込め、動き出そうとしているのが分かる…

「だめっ！今動いたらっ——」

欲棒がまっすぐ真下に打ち付ける。限界に近いのか、より硬くしながらぶるぶると震え、十度ほど抉り——

『ずぶんっ！ズボズボズボズボズボズボズボ……!!』

「ああ——っっ！おおうっ！あはああああああ……!!」

盛大に、濃く滾る種をぶちまける。

『びゅ——ッ！びゅ——っ！びゅ〜〜〜っ!!』

「ああああああ!!イクうう——っ!!」

情けない格好で、まさかの中出し絶頂。余りの快樂に、雌の鳴き声を上げるとガックリ気絶してしまう。
注ぎ込まれる子種の量は許容量を越え、溢れかえってもなお送り出される。

『びゅぐっ……びゅぐっ……びゅぐっ……っっ!!』

勢いは衰えながらも更に断続的に前後して発射する。数秒の余韻の後、すっかり発情しきった**アクメ戦士**を優しく放り捨て。
画面に映る真っ黒なバーと「12hit」。
気を失い、写真を本人が見る事はできなかったが…**立派なアへ顔で中出しに打ち震える牝**が表示されていた。

1R 0:43 WIN-Kuromaru

快樂で気絶に追い遣った証に、ぼうっとクロマル側の空玉が赤く染まる。

捨てられた女戦士はどこから出たのか、別の触手に包まれ、体表面を洗浄される。
一体何が起こったのか、意識も通常の状態に戻され…混乱していると、既に直立で立たされていた。

(や、やっぱり……)

信号が再び灯を付ける。

碧が灯され、第二ラウンドが始まる。

■2ラウンド

開始と共に、触手が唸りを上げる。

瞬く間に進む状況に戸惑いながら、タイカは少しずつ頭の中を整理する。

(ほ、ホントにゲームの世界みたい……)

黒球が最初から全開なのを除けば、前のラウンドと状況は同じ。顔も体力バーも1ラウンド開始時と同じだ。違うのは勝利数くらいか。

振り回す触手の鞭は確かに速く、**避け切るのは不可能、……だが、捌き切れないことはない。**

今度こそ息もつかせぬ連打で仕留めようと、下半身に力を入れ——

『ズクンっ』

「〜〜っ?!」

まだ胎内にじんわりと残る淫熱に震える。

思えば、洗われたのは外側だけだ。当然と言えば当然だが——腹や下腹部、尻……体の芯に力を込めると、『**ごぼっ**』と音が聞こえてきそうだ。

(こ、ここも治しときなさいよ〜〜!)

気付けば劣勢に追い込まれ、段々動きにキレがなくなってくる。文字通り身体の中心部を責められては力の入れようがない。

中距離から踏み出せないでいると、触手達が突如合体して**二つの巨大な手**と姿を変える。

両手で押し潰そうと、**左右から肉掌が迫ってくる。**

「こ……のおお!」

広げた腕と気合で喰いとめる…が、やはりウェイトの差が大きく、じわじわと狭まる。

「〜〜っ!」

このままではマズいと考えたタイカは、掌を止めるのをやめ、真っ直ぐ踏み込んでいく。

胎からの淫撃を必死で抑え、鋭い飛び蹴りを喰らわす。

「森羅一閃ッ!」

ギャリッ、と肉の抉れる音が響き、クロマルが怯む。

「獅子雷塵っ!花鳥桜吼ッ!流影無双おお!!」

半ば自棄になり、オリジナルの連続技をいくつも浴びせる。ヒット数は20を越えていくが、やはり力が本調子ではないのか、体力はようやく三割削れたところ。

「氷刃っ……!」

隙間なく畳み掛けて逆にタイカの方が疲れてしまい、攻撃が緩む。

僅かな間ができ、ガードする余裕を与えてしまう。「28hit」表示が薄くなっていく。

技を放った後の硬直を狙い、**淫鞭が腰を掴んでくる。**

「いやああっ!」

ぐるんっと**後ろを向かされ、尻を突き出す格好に。**

別の触手が**べろん**とスカートを捲り、このラウンド中に出た淫液で**濡れた見せパンが丸見えに**なる。

『べろんっ!』

「あっ!……ああっ!」

すっかり敏感になった**尻を伸びる舌で舐められ、その度に仰け反って啼いてしまう。**

『べろんっ!べろんっ!』

「んあああっ!」

4hit 目でようやく解放される。

しかし折角自由の身になっても、**一気に三割がた削られて、膝をついたまま動けない。**

その隙を逃さず、触手が追撃。腰、足首を締め付けて固定し、再び極太でずらし挿入を試みる。

「ま、待っ…」

『ずぶうう！』

「あひいいい！」

一突きでピクンピクンと痙攣する戦士を気にせず、極太剣が渾身の突きを何度も喰らわせる。

『ずぼっ！ずぼっ！ずぼっ！ずぼおお！』

「あっああっあああああぁ！」

先程の攻撃からコンボになったらしく、「9hit」で体力が七割強ほど追い込まれた。

あまりの猛攻が効いたのか、肉槍が抜かれてもカクカク腰を振る事しかできない。

それでも何とか立ちあがった時……触手が、胴に巻き付かんと横から打ち付ける。

（こ、この技はっ……！）

前ラウンドで決め技となったパターンを思い出し、脇をしめて防御——できず、素早い鞭が胴に絡み、体を高く持ち上げる。

「ああんっ！」

再び肉でできた黒椅子の上で逆さ開脚まんぐり返しの姿勢を取らされる。

「だめえっ、この技は——！」

一度見た技にまたハマる……格闘家としてのプライドも崩され、容赦なく極太でへろへろマンコを串刺しにされる。

『ずぼおおお！』

「あああああ——っっ!!」